

## 【令和3年度実績】

### 1. 展示や各種企画を通じた大学の研究成果・学術資源の公開による社会貢献事業

No.35 ②-1 社会連携活動の全学的推進

No.36 ②-2 知縁コミュニティの創出・拡充への寄与

#### 実績報告

1) センターとして、展示公開施設に対する文化庁の補助金に申請し補助を得て、新型コロナウイルス感染症対策を強化した。昨年度から始まった文化芸術振興費補助金(文化施設の感染症防止対策事業)事業の第2次募集分として4,208,000円、第3次募集分277,000円の交付を受け、各館園の対策の強化を行った。センターの展示公開施設は、前年度に策定したセンターの感染症対策ガイドラインに従い閉館措置を取ったが、行動指針(BCP)がレベル1に引き下げられたため、10月より各館園の展示公開を再開した。あわせて、コロナ感染症の知見と対策が進んだ状況を踏まえ、本部の対策本部専門家の意見をj得てガイドラインの見直しを行い、行動指針(BCP)レベル2においても展示公開施設の開館が可能となり、開館を継続することができた。学内限定の企画ではあるが、附属図書館エントランスを利用した、学術資源研究公開センター3施設合同企画展示「大學さんぽのススメ2 in 附属図書館本館」を開催した(2021年10月11日～11月5日)。

2) 新型コロナウイルス感染症対策のため、オンライン企画やYouTubeを利用した企画を推進した。総合学術博物館では、クロスアポイントによる講師を海洋開発研究機構(JAMSTEC)から招聘し、WEB上でのオンライン特別企画「深海底の科学とプレートテクトニクスの発展」として公開した。総合学術博物館のYouTube公式チャンネルを開設(2021年6月より)し、標本館内の展示関係動画を制作した。2022年2月現在まで18本配信済み。この取り組みにより、総合学術博物館のホームページ訪問者数がコロナ前の約1.5倍の301,504件に達した。植物園では、上記文化庁補助金を活用し、天然記念物「青葉山」のドローンによる空撮動画や園内の動画の撮影を進めた。現在、動画の編集作業を進めており、近日中に植物園Youtube公式チャンネルを開設する予定である。史料館では、コロナ禍においてキャンパスに来られない学生や同窓生のために、東北大学公式サイト上に、東北大学キャンパスガイドを開設すると共に、コロナ禍のキャンパス定点観測撮影を病院広報室、災害研とともに継続して実施している。合わせて職域接種の記録撮影等、COVID-19に関する東北大学対応記録のアーカイブ事業を展開した。

3) 総合学術博物館では、感染症対策を考慮し規模の大きな企画は難しかったが、展示企画や改修を連続して実施した。

ミニ展示コーナーを新たに開設し、「青葉山周辺の有名鉱物たち」(～1月)、「宮城県内で採れる鉱物 Part.1 文字の鶏冠石」(10月～2月)、宮城県内で採れる鉱物 Part.2 白石の沸石」実施(2月～)、「福徳岡之場軽石展示」実施(1月～)をそれぞれ実施した。さらに新たな常設展示として「東北地方の中生代大型脊椎動物」のパネルを設置し、河北新報で紹介された(図1)。




小企画展「ヨーロッパ古地図にみる世界と日本」(会期:2021年10月15日～2022年1月16日 会場:自然史標本館展示室2F、図2)、(共催)企画展「石っていろいろ!～仙台のミュージアムの“石”が大集合!～」(会期:2022年1月21日～3月13日(日) 会場:地底の森ミュージアム企画展示室、図3)を実施した。

福井県立恐竜博物館の特別展「海竜展」にて、総合学術博物館所蔵のウタツサウルス標本を提供した(会期:2021年7月16日～2022年1月18日)。一方、総合学術博物館では、福井県立恐竜博物館から借用した化石標本(福井県から発掘された恐竜を含む爬虫類と二枚貝等)の展示を2021年10月15日～2022年1月23日まで行った。

附属図書館工学分館貴重書展示「Il Tempio Vaticano e sua origine -ヴァチカンの大聖堂とその起源-」への協力・解説執筆等(会場:工学分館エントランス 会期:2020年10月19日～10月30日)。図書館北青葉山分館展示スペースへのトルカ隕鉄、はやぶさ模型貸出(12月～)など、図書館の展示公開事業と連携した取り組みも進めた。

4)センターでは、本部総務企画部総務課と連携し、片平地区旧金研10号館(放送大学として2・3階使用)1階の、広報展示スペース整備を担当した。また、本学総務課、資産管理課、図書館と連携し、西澤記念資料室(旧半導体研究所1階)の整備を進めた。史料館が担当し、一昨年度寄贈を受けた西澤潤一関係資料の本格的な目録を作成、合わせて附属図書館と協力し保存公開についての方針を策定した。西澤潤一関係資料は、晩年の記録だけでなく、学生時代からの膨大な資料が遺されており、研究資料のみならず、卓越した研究の知的基盤そのものを解明すべく、バイオグラフィーから位置づけるアーカイブ構築を附属図書館と連携して進めた。

5)史料館では、旧制二高同窓組織と連携した取り組みを行い、明善寮・旧制二高関係者からなる新規同窓組織:蜂萩会の萩友会加盟、旧雨宮キャンパスから片平キャンパスへの史跡移設(栗野観音等)について協力をおこなった。

 [図1 河北新報記事.jpg](#),  [図2 ヨーロッパ古地図にみる世界と日本フライヤー.jpg](#),  [図3 石っている！～仙台のミュージアムの“石”が大集合！～フライヤー.jpg](#)

## 2. 独自性を活かした復興支援・震災記録事業の推進・展開

No.37 ①-1 東北大学復興アクションの着実な遂行

No.38 ①-2 復興に長期を要する被災地域への貢献

### 実績報告

1)センターでは、人間文化研究機構が中心となり東北大学・神戸大学との3者で2018年度から4ヶ年で実施されてきた歴史文化資料保全ネットワーク事業の東北大学拠点に参加し、「歴史資料保全コーディネーター講座」(全15講義)を担当してきた。今年度は2022年3月7～9日にオンライン形式で実施し、80名が参加した。本事業の最終年度のため、同講座のテキストブックを編集し3月刊行予定。

2)総合学術博物館では、南三陸町における被災ミュージアム支援活動として、NPO法人 夢未来南三陸が運営する「みなみさんりく発掘ミュージアム」による小学生向けの発掘イベントを2021年10月2日に開催した。福島県富岡町の富岡町アーカイブ施設整備識者検討部会の委員として、富岡町内の化石や岩石についての展示指導を担当した。同施設は、7月11日に「とみおかアーカイブ・ミュージアム」として開館した。

3)史料館では、2023年度に開館する仙台市公文書館の運営検討会議に史料館教員が座長として関わることを通じて、官学連携した東日本大震災と公文書管理に関する記録の収集選別基準の策定を進めた。さらに岩沼市において新たなアーカイブ機能について検討する、岩沼市史収集資料保存活用等検討会でも、史料館教員が副委員長と務めるなど、地域自治体における震災公文書の保存継承に主導的な役割を果たした。

4) 史料館では 2021 年 4 月 23 日～24 日、10 月 15 日～16 日、デジタルアーカイブ学会全国研究大会を災害科学国際研究所と連携して東北大学に誘致し延べ 2178 の参加をみた。研究大会を通じて、デジタルアーカイブと先端技術と、東日本大震災における震災記録の保存・継承に関する最先端の研究成果について、東北大学から発信することが出来た。

 図4 歴史文化資料保全コーディネーター講座フライヤー.jpg

### 3. 大学の有する自然環境・歴史的資源の保全と活用を通じた社会連携の強化

No.71 ①-1 知的交流と国際交流を促すキャンパス整備

No.81 ①-1 地域住民等との協働の緊密化

No.82 ①-2 校友間の協働の緊密化

#### 実績報告

1) センターとして本部総務企画部総務課など関係部局と連携して進めてきた、片平地区の歴史的建造物の登録文化財への申請を前年度に行った。2021 年 7 月 16 日に文化審議会の答申がなされ、東北大学の 8 件について登録文化財に登録されることとなった。本学の登録有形文化財(建造物)は、合計 13 件となった。

2) 2022 年度の東北大学創立 115 周年・総合大学 100 周年事業にあたりセンターでは、キャンパス資源活用の取り組みについて関係部局と連携して検討を進めてきた。総合大学 100 周年記念事業部会への委員参画、広報部会の副会長を務めるとともに、ウェブサイトコンテンツ、記念展示案の立案、登録有形文化財のライトアップ計画などに貢献し、企画・実施について、関係委員会・部会、プロジェクトチームと連携し事業の推進に寄与した。

3) 萩友会関西交流会に際し、史料館では大学史に関する特別講演を企画実施し、基金・校友事業室と協力して校友アイデンティティの創出に積極的に寄与した。また本学の教職員、学生のエンカレッジと登録有形文化財の魅力発信の施策として、魯迅の階段教室の屋根意匠の改修、また史料館本館瓦屋根の改修を施設部、資産管理課と協力して実施した。また、昨年 2 月の地震による復旧工事では、各種登録有形文化財の外壁改修等での監修をおこなった。

4) 史料館では、2020 年度に登録有形文化財である本部棟3魯迅ラウンジのスペースに新たな展示空間である、階段教室展示ルームを整備し、昨年 10 月より開設、更にオンライン予約システムを整備することで、同じく登録有形文化財に登録されている、魯迅の階段教室と一体的な観覧性を高め、学内歴史的建造物のアウトリーチ体制を強化した。

5) 史料館では、2019 年度以来、天井耐震改修工事が行われていたが、2021 年 10 月より展示室を全面リニューアルし、コロナ対応に資する導線を整備し、展示面積を広げ、展示内容を充実させた。この結果、国立大学アーカイブズの中では国内最大級の展示空間が整備された。またあわせて史料館内全体について edroam(無線 LAN)を使用可能な環境に整備し、リアルな展示と DX 活用を見越した館内機能の拡充に努めた。

6) 植物園では、天然記念物再生事業(国庫補助事業、2019 年度より 5 年間)を実施し、天然記念物「青葉山」におけるナラ枯れ抑制と安全確保のため、各種事業を実施し、その保全に努めた。

---

## 4. 公文書管理による大学運営への貢献

No.79 ①-1 多様な教育研究活動等を支える情報基盤の活用充実と高度化

No.80 ①-2 学術情報拠点としての図書館機能の活用

### 実績報告

1) 本部事務機構の協力の下、現用・非現用のライフサイクルに基づく適切な公文書管理と評価選別・移管を実施し、歴史公文書の保全に努めた結果、本年度は国際標準 6%を越える移管率 8.8%を達成した。また工学部百周年記念事業に係る年史編纂記録の移管を受けるなど、部局周年事業とその後の公文書管理との連携を強化した。

2) 史料館では、第 21 代総長期の 12 名の執行部に関するデータベース化を進めると共に、事務機構長実績ヒアリングを実施した。また東北大学の理念の形成過程については、総長級に関しては、これまで資料が散逸していると思われていた第 5 代総長井上仁吉の資料群を保全し、周年事業に資する本学の歴史継承のためのアーカイブ化を実施した。さらに西澤潤一元総長の関連資料を再整理し、西澤記念資料室の整備をおこなった。

3) 史料館では学内法人文書収蔵環境を再整備し、2020 年度末までに従来の収蔵量を 1.7 倍に増床したが、2021 年度もさらに書架配置を見直し、収蔵量の増床に努めた。この結果、国の公文書管理法による国立公文書館等指定施設の収蔵規模は、全国第 6 位から 4 位に向上された。

4) 史料館では、文学研究科・法学研究科と連携し、2022 年から開始となる、アーキビスト養成のための大学院カリキュラム「認証アーキビスト養成コース」を文学研究科に設置する上での制度設計をおこなった。公文書管理の専門職であるアーキビストの教育プログラムを大学院で設置するのは、全国 4 例目であり、東大や京大に先駆けて、関東以北では初となる事例となった。

---

## 5. 先端技術を活用した学術資源利用の促進

No.19 ①-1 長期的視野に立脚した基礎研究の充実

No.26 ①-1 多彩な研究力を引き出して国際競争力を高める環境・推進体制の整備

No.33 ②-4 国際共同利用・共同研究拠点及び共同利用・共同研究拠点の機能強化

### 実績報告

1) 総合学術博物館では、東日本大震災の震災遺構の 3次元デジタルアーカイブデータを WEB 配信し、オンラインで利用する方法の検討と試行を行った。高分解能 X線 CT 設備(学内共同利用)を活用し、学内外の機関の多様な分野の研究者との共同研究を継続して実施した。

2) 史料館では、東北アジア研究センターとともに、地域研究デジタルアーカイブの構築に協力し、37,112 件のデータベースからなる、「地域研究デジタルアーカイブ」を国際的な画像共有の枠組みである IIF で公開するとともに、新たに年度末までに 4 コレクションを増補した。さらにハーベスティング機能を新規に実装し、日本最大級のデジタルアーカイブポータルである国立国会図書館 ジャパンサーチと連携可能な仕組みを整えた。ジャパンサーチとの連携を前提とした、こうした取り組みは、東北大学学内におけるデジタルアーカイブ公開での初めての事例となった。

3) 史料館では、日本学国際共同大学院プログラムと連携し、イタリア・ローマ大学との間で、プログラムの趣旨である「現代社会」の問題を追求するテーマとして、日本とイタリアの「長い 1960 年代」(Long60s)の比較研究を実施した。現代社会の直接的な基点、このテーマの日本側の教育・研究を推進するために、東北大学史料館で所蔵している 1960 年代の社会運動・学生運動関係の資料について公文書、個人文書双方から統合的なデジタルアーカイブの構築を試みた。海外との共同研究を視野に入れた「Long60s」の大規模なデジタル化計画は日本では初の事例となる。

4) 植物園本園の天然記念物指定範囲は、環境省のモニタリングサイト 1000 事業の準コアサイトとなっており、今年度も植生概況調査、陸生鳥類調査、甲虫調査を実施した。さこれらの成果の一部は、環境省モニタリングサイト 1000 の HP (<http://www.biodic.go.jp/moni1000/index.html>)で随時発信されている。

植物園では標本庫に収蔵されている 7000 件のさく葉標本のデータを、国立科学博物館が運営する S-net(サイエンスミュージアムネット, <http://science-net.kahaku.go.jp>)を介して、GBIF(地球規模生物多様性情報機構, <https://www.gbif.org>)へ提供した。GBIF は、自然史標本データおよび観察データを中心に、世界の生物多様性情報を共有し、誰でも自由に利用できる仕組みを構築することを目指した取り組みである。これまで国内の博物館・研究機関 104 機関が自然史標本情報を提供しているが(575 万件:2020 年 10 月現在)、東北大学から同機関への標本データの提供はなされていなかったため、新たな取り組みとなった。

---

## 6. 教員の研究時間確保に係る取組

### 実績報告

センターを構成する総合学術博物館、植物園、史料館の各組織では、対面で行う必要の無い会議・打ち合わせは基本的にオンラインで実施している。センター3施設間での会議・打合せも基本的にオンラインで実施している。このことによって教員の移動負担軽減がはかられており、研究時間確保につながっている。

史料館は、必要に応じて教員に実務業務が入らない研修日設定を行い運用しており、研究時間の確保に努めている。